温故知新

島田　和佳（鹿児島大学教育学部附属中学校三年生）

突然だが、わたしは幸せなのだろうか。

いつも思う。わたしの生活といえば、とても単調でつまらないものだと。学校に行って、勉強して、帰ってきて勉強して、寝る。いつも、「何か大事件が起こらないかな。」などと、不謹慎なことを考えてしまう。

みんながみんな、そんなことを考えているのだろうか。わたしだけだったら嫌だな、と思う。そんな愚痴をこぼすとき、決まって母に言われるのが、

「本を読みなさい、本を。そんなに心がうすっぺらいから、毎日つまらないのよ。」

という言葉だ。

母の言葉にはとても納得する。確かに、本を読む人間は美しい。毎日に飽きるなどと言わないし、話していて楽しい。言葉を学べるし、知識も得られる。本には、なかなかたくさんの魅力があると思う。

そう思い立ち、本を読んでみたことがあった。あれは、小学四年生の、夏―。

わたしは、ある中学校に憧れ、中学受験を考えていた頃だった。その学校に入るため、塾の夏期講習に通い始めたのだった。最初はとても楽しかった。新しいことを学ぶのが、問題を解くのが、質問をするのが、とても楽しかった。また、自分がちょっとずつ物を覚えていくのが嬉しかった。そのわくわくした気持ちから、毎日のように塾へ通った。

しかし、ある日を境に塾に行かなくなった。

いや、行きたくなくなったのだ。それは、テストの日だった。テストがまったく解けなかったのだ。ショックだった。それに追いうちをかけるように順位が貼り出されたのだ。

わたしの名前はとても下にあった。探しても見つからなかったが、こんなところにあったのか、と絶望した。心の中で、何か崩れるような感じがして、うきうきと明るい気持ちはどこかへ消えた。暗い気持ちばかりで、塾に行かなくなってしまったのだ。

夏休みということもあり、わたしはずっと家にいた。何をするわけでもなく、ずっと家でゴロゴロしていた。そんなわたしを見兼ねてか、母はわたしに、一冊の本を差し出した。

それは三浦綾子さんの「細川ガラシャ」という本だ。あまりにおちこんでいたので、本を読む気もなかったが、しぶしぶ読んだのだった。つまらなさそう、と思いながら。

しかし、その本は予想をはるかに超える面白さだった。わたしに、たくさんのことを語ってくれたのだ。その中

でも一番好きな言葉が、

「散りぬべき　時知りてこそ　世の中の　花も花なれ　人も人なれ」

という言葉だ。細川ガラシャ辞世の句。

この言葉の意味は、

「死ぬときになり、やっと分かったのだ。花は花であり、人は人であると。」

という意味だ。つまり、人それぞれ。

わたしに言っているのだろうか、と思うほど、胸にひびいた。人と比べてばかりでは、前に進めない。自分らしく頑張ろうと、わたしなりに思えた。とても明るく、軽やかな気持ちになれた。わたしは、もう一度塾に行こうと思えたのだ。それからは自分なりのベストを尽くして、壁を乗りこえながら、この中学校に合格できた。

わたしは、今、困ったことや、どうしても乗りこえられない壁にぶつかったとき、本から答えをもらう。本には古きよき言葉がつまっているから。わたしたちが今、生きているのは、先人たちのおかげだろう。先人たちが作った礎があってこその今だ。そんな先人とわたしたちをつないできた、たくさんの美しい言葉たち。わたしが思う本当の温故知新とは「先人たちから受け継ぐ美しい言葉」だと思う。それらの言葉はわたしたちの疑問に答えてくれる先人たちのたくさんの知恵と指針がつまっているからだ。

最初の質問。わたしは幸せなのだろうか。

答えは、

「はい。」

なぜなら、こんなにもわたしを救ってくれる美しい言葉が、わたしを支えているから。